悲しみを乗り越えて

逗子市支部　田村　美智代（子）
戦没者　石黒　新一
戦没地　ビルマ

今年の七月二十七日は、空は青く、雲ひとつない快晴でした。この日は父の六十五回目の命日です。毎年この日が来ると、あと一ケ月元気でいて呉れたら終戦となり、私達母子の許に帰って来てくれたのではないかと思うものです。

父は、母と兄八歳、私五歳、妹生後五カ月の子供三人を残し召集されました。

私には、父に肩車をしてもらい上野駅で別れたことが微かな記憶として残っているだけです。「来年は幼稚園だね。お母さんの言うことを良く聞くんだよ」ビルマからの父の最後の手紙に、私のことも書いてありました。

昭和二十年三月十日東京大空襲で一面焼野原になってしまいました、昭和二十二年に疎開先より元の住所に、祖父母と私達母子四人は戻りバラックの家を建てて、父の帰りを待つことになりました。それからは、母は一家が生きていくために、自分の着物をリュックに詰めて、東京近郊の農家へ米、野菜等を分けて貰うため、慣れぬ力仕事にも父の帰還を信じて一生懸命に頑張って

©2011_財団法人神奈川県遺族会

いました。
その矢先、母の許に父の戦死の公報が届き、それまで気を張って頑張っていた母も過労が重なり体調を崩す様になりました。
昭和二十四年十二月上野アメ横が大火となり、我家の庇にも火の粉が飛んできて類焼となってしまいました。母は重なる不運にショックを受けて寝込む日が多くなり、翌二十五年一月六日三十六歳の若さで黄泉の世へと逝ってしまいました。私達兄妹はとうとう親無し子となってしまったのです。幸いにも祖父母が健在でしたので、親代わりとなり私達を育ててくれました。
私には、生涯忘れることの出来ない悲しい思い出があります。小学校六年生の社会科の時間のこと。両親が新聞のどのページを読んでいるのか?を聞いて来る様にとの宿題がありました。次の時間に、それぞれが、親の読むページについて、先生の問いに手を挙げてゆきます。手を挙げない私に、先生が「宿題を忘れて来たのか?」と皆の前で問いました。その時「お父さんもお母さんもいません」と言って泣き出したことを今でも鮮明に記憶しています。
また、中学一年生の「母の日」のこと、学校で赤いカーネーションが配られました。母のいない私だけが白いカーネーションでした。白いカーネーションの謂れを祖母に話せずにカバンに入れたままにしていました。他人から見れば些細なことかも知れませんが、親の無い子はなんでこんなに差別されるのかと、この二つの出来事は、少女時代の悔しく悲しい思い出として、人にも言えず心の片隅にずっと仕舞っておいたことです。
父母無きあと、不自由なく、大事に大事に育てて呉れた祖父母も、私の成人を待たずに亡くな

©2011_財団法人神奈川県遺族会

りました。今、幸せであることを感謝しつつ、二度と戦争を繰り返してはならないと強く思います。

©2011_財団法人神奈川県遺族会